

主題のある資料群を用いた図書館資料アクセス方法の提案

An Access Method to Library Materials Using Books with a Theme

学籍番号：201621610

氏名：坂本 かなえ

Kanae SAKAMOTO

図書館において利用者は様々な方法で資料へのアクセスを行っている。代表的な資料へのアクセス方法として、OPACを用いた検索、図書館職員によるレファレンス、資料の展示や書架におけるブラウジングなどが挙げられる。このような従来の図書館資料へのアクセス方法により、図書館利用者は自らが探している資料を手に入れている。しかし、これらの方法で利用者が目にすることができる図書館資料は、図書館の全体の資料の中でも一部にとどまっており、図書館利用者は図書館の豊富なコレクションを使いこなせていない。

そこで、卒業研究では図書館資料へのアクセス方法として、あらかじめ指定された経路を辿って、同一の主題を持つ資料群を入手するトレーシングという手法を用いて、図書館利用者を普段向かわない書架に誘導をし、資料選択の幅を広げる研究を行った。卒業研究ではトレーシングにより利用者が新しい興味関心を手に入れる傾向があることがわかったが、それは物理的に書架を見る効果であり、主題を持つ資料群を探索したことによる影響があったかは判明しなかった。したがって、本研究では主題のあるトレーシングが図書館において利用者の資料選択の幅を広げることを明らかにすることを目的とする。

筑波大学図書館情報学図書館において筑波大学の学生13人を対象に実験を行った。実験では主題のある資料を使う「主題あり群」と主題のない資料群を使う「主題なし群」に被験者をわけた。「主題のあり群」には2つの主題の本をそれぞれ5冊ずつ、「主題なし群」には主題を設定しない本をそれぞれ5冊ずつ、どちらも合計10冊の本を探索してもらった。また、実験中に興味がある本を発見した場合、書架からとってきてもらい、「見つけた本」とした。実験の結果、「主題あり群」は「主題なし群」に比べて、「見つけた本」の数が多く、それは「主題あり群」の方が本の探索が作業にならず、書架を見る時間が増えたためであると考えられる。さらに、「主題がある資料群」の方が「見つけた本」の中に潜在的に興味がある本が多く、自力では見つけれないとする本も多かった。ただし主題の有無が本の発見や選択の幅を拡張したことの因果関係は本研究では明らかにならなかった。

本研究では主題のある資料群を用いたトレーシングを行うことで、物理的に書架を見るように促し、結果的に興味がある本として手に取る本を増加させることがわかった。今後の課題は、主題のあるトレーシングが潜在的に興味がある本や自力では手に入れることが困難であった本を提供する一助となったか検討し、その因果関係を明らかにすることである。

研究指導教員：宇陀 則彦

副研究指導教員：松村 敦